

シンポジウム「トレイルランニング大会と環境」要約

1：忠政恵氏

森林官は「森のおまわりさん」という、森の中を歩く仕事をしておられた忠政氏。

「国土の 2/3 を占める森林には持ち主がおり、6 割の私有林と 4 割の公有林からなっていて、保安林が森の半分を占めている。森林の 4 割はスギ・ヒノキ等の人工林である」という。保安林に変更を加える場合は許可必要で、違反した場合罰則が適用されることがある。

また、国有林で他者に大きな影響がある場合のイベント開催には 3 段階の規制（規制なし→規制有→禁止）があり、許可が必要で、9 つのルール（レジュメ参照）を守ることが大切と説く。

林野庁の組織としては、国土の大半を占める森林の有効活用をすすめる意味で国有林の利用には積極的だが、現実には安全や登山者からのクレームが多いため、現場ではトレイルラン大会には消極的な反応がよくあるという。

山に支えられてきた国の山村の歴史は日本の歴史を形づくってきており、山村の高齢化とともに山を守り育む知識と文化が消えてゆくことを懸念する。

2：忠政啓文氏

競歩の日本チャンピオンを経て、愛媛の山村で郷土史ライターを職業とする忠政氏。山を走りながら、山村の振興にトレイルランをどう役立てるかを考え、地域の歴史文化とトレイルランを結びつける NPO 活動を行ってきた。

人的・物的負担を地域に強くない『『トレランガイド』の案内による少人数で地域文化を学ぶイベント』という新しいトレイルランのあり方を提唱している。

地方ではすでにマラソンや各種のイベントが多く、その度にかり出される地元民にとってトレランの大会運営への参加は難しい場合がある。また約 10 万人と言われる愛好者に対し、約 300 という大会数は多すぎる。

昨年、愛媛県西条市を中心に企画された 100 マイルトレイルレースは、具体的な計画と準備がないまま予算化されたが、ただ「ブームに乗って開催したい」というだけの動機では、計画のずさんさや甘さに計画にたいする理解が得られず、実現はしなかった。行政としても中山間地域の活性化には積極的で、トレイルランにも注目は集まっているが、これからのトレイルラン大会の発展には、利害関係人（県・市・地元）の意見を聞きながら計画を進めてゆくことが必要だろう。

3：吉永耕一氏

富士山を訪れる人に、安全に、かつ環境に対してローインパクトで過ごしてほしいという思いで活動している「ふじさんネットワーク」の富士山エコレンジャーの一員。

富士山南麓森林の植生は、人工林から始まり標高 1800 m を超えると自然林へと大きく広がっている。南麓の森は、崩れやすい土壌で、台風による大倒木を契機に自然林回復活動が行なわれている。近年シカの個体数増加による森林植生の衰退、土壌侵食が目立ち、ガイドレス・ツアーなどの人為的要因も加わって被害は深刻。

2012 年に開催が始まったトレイルレース UTMF を 2 年にわたって調査を続けた結果を述べた。参加者 1000 人～2000 人という大会では、この圧倒的な人数が一時に通過することによって、連続

踏圧やトレイルの複線化、樹木の損傷などの一次的ダメージを受け、土壌は、その後の年間 4000mm に達する多雨によって二次的に損壊を拡げて行くという。写真で示された、トレイルの損壊と斜面の崩壊には参加者の多くが、ショックを受けていた。これらの状況を UTMF 主催者に送り、対処と説明を求めたが、芳しい対応はなされていないという。

連続踏圧や登山道荒廃等の研究は、すでに神奈川県ではなされており、そうした知見を活用して主催者には事前のアセスメントの実施とコース変更などの対応を要望している。

4：貝畑和子氏

新潟県という日本海とアルプスに囲まれて幼少期を過ごした貝畑氏は、国内の UTMF や信越のトレイルランから、ヨーロッパやアメリカのロングトレイルまでを走った経験から、自然の素晴らしさを訴えた。しかし、貝畑にしても、走ることがそれほど環境に対しインパクトがあるとは想像していなかったという。アメリカやヨーロッパのトレイルは歴史も古く、地盤がタフであるので、日本の地質や気候にあったやり方を考えていくべきで、細い稜線が中心の登山道よりも林道などを使用する方が良いと考える。自分たちは、生きるエネルギーを感じ自然の中にいる喜びを感じているだけでは、もう、いけないのかな、と感じているという。

5：岡本清次氏

第一回目の UTMF は最後尾で、ごみ拾いながら完走し、その後、各地の大会に、ボランティアとして参加する岡本氏。彼のフィールドは大阪にある箕面の里山。そこでは様々な問題に日々直面している。ハイカーが少なく、駅から遠い環境では、二輪車が無秩序に走り回り、ドライブウェイ沿いなどでは、家庭ゴミ・産廃の不法投棄や、生態物（ペット等）までも捨てられている。猿や鹿による被害・ナラ枯れの被害など、現状は刻々と変化していつている。彼はその現状に気が付いた時、トレイルを走るだけ立場から、保全する立場へと意識が変化し、日々里山を散策しながら、気が付いた点・発見したことは、箕面の山を守る NPO 団体と連携を図って行動している。

関西では様々なトレイル大会がある。六甲山・京都・生駒・ダイトレなど、50 人程度の草レースから、1000 人規模の大会が存在し、地域から誕生した大会から、多くの参加者を募集し、公共場所を勝手に利用したり、マーキングを回収しないなど、商業的に感じられる団体が開催する大会まで様々だ。

宗教的な場所（山）も多く、比叡山・高野山・大峰奥駆道・熊野古道・弘法大使の道など、注目されるようになり、一部の地域関係者は喜びの声を上げる一方で、信仰を持つ人間からは嫌煙されている。

トレイルランニングは、新しいスポーツかも知れない。大人になって始めた人がほとんどではないだろうか。これが部活動で小さい頃から教育されていれば、山の独特なルール・マナーなど知る人も多いはず。ランニングブームから、トレイルランニングブームへ。距離がロング化し、レースは高速化へ向かっているように感じる。一部の愛好者・ショップ・企業などが、ブログや SMS などを通じ、各々の思惑を持ちながら煽っているように感じる。

開催する地域の文化・伝統・歴史など地域住民が再発見し、地元愛を確かめ、一人ひとりに根付かせる。訪問者へ地域の良さなどを知って欲しい気持ちから、大会を企画運営するスタンスが望ましいと考える。

宿泊先・募集人数・駐車場や、コースで使用する地質・環境など、多方面から意見を仰ぎ、地域住民が楽しみながら積極的に関わり、地域課題を大会参加者と解決していく。

規模が小さくても、後世続く大会こそ、地元の文化・伝統・歴史と、トレイルランニングの文化が定着し、持続可能な大会として続くように思う。

6：山崎裕晶氏

文科省管轄の登山団体の組織は、「日本体育協会 < 日本山岳協会 < 各都道府県山岳連盟 < 個々の山の会」という構造になっており、安全等に対する規則ルール決定や指導・講習会などはこのルートで行われている。

組織としての日本山岳協会や東京都・大阪府・兵庫県の岳連はそれぞれ、ハセツネ・ダイトレ・六甲というトレランも含む大きな大会を運営している。つまり、組織としてはトレイルランに対しては積極的に進めているように見える。しかし下部のレベルでは別で、苦情も多いよう思われる。登山者とトレイルランナー、迷惑に感じる問題があるとすればマナーと相互の理解不足という問題ではないか。

マナー問題について、登山者間でもマナー問題は生じている。登山者とトレイルランナーの相互理解問題については、登山者には「理解できない」と感じる人が少なくないのでは？しかし、ハイカーとクライマーの間でも同様の感じはある。

よく取りざたされるトレイルランナーと登山者の関係は、登山者と山村住民との関係に置き換えることもできるのではないか。登山者も山村住民からみれば特に最初は迷惑な存在だったと思う。

ただ、トレイルランの現状に対して、登山と同じ危険性をはらんでいるにも関わらず、危険よりもウェアやギアの楽しみ、自然の素晴らしさといった部分のみが喧伝されているように見える。また、近年の登山事故を見ていると、そもそも危険性を理解していない結果の遭難者がいる。危険と解って対処していても、自然の力に前では無力なこともある。登山者もランナーも自然に対して、もっと強い「畏怖の念」を持って接するべきであろう。



7：質疑応答

【Q】 正木山トレイルラン運営関係者より、集落の山の使用許可について、現状では集落の長に許可を得て運営しているが、それでよいのだろうか？

【A】 誰のものかわからない山が多いのが現状で、現実には森林組合が管理している場合が多いので、森林組合にも相談を。(忠政恵氏)

【Q】 トレイルガイドによるトレイルランは、登山におけるパーティと同じようにノウハウや知識の伝達ができるようにするのが良いのではないか？トレイルラン大会数が過多という意見があった

が、企業サイドから大会数増加を図っているように思える。

【A】トレイルガイドは走ることだけをガイドするものでなく、地域の文化を紹介し自然との接し方や、そのランニング前後の旅さえも含めてガイドする。企業としても、理想は底辺の拡大であるが、トップダウン式の安易な拡大を狙わざるを得ない企業の理由がある、しかし、普及による底辺の拡大を考えてゆく態度は持っているようだ。(忠政啓文氏)

【Q】富士山の写真に見られたトレイルへの影響を防ぐために、どれくらいの規模ならよいのか？ダメージから自然復旧するまでにどれくらいの時間がかかるか？

【A】すでに大沢川での連続踏圧テストのほか、神奈川県にも調査・研究の蓄積がある。大会主催者はその知見を活用してほしい。環境アセスメントは大会主催者が事前に実施し、あわせて第三者の専門家による定期的なモニタリング調査が必要であろう。(吉永氏)

【Q】UTMBやトルデジアンに等、ヨーロッパのランナーは環境についてどう考えているか？

【A】自然・環境・危険など、普段の生活では感じられないことが、トレイルの上では感じるができる。それらについてはヨーロッパも日本人も、さほど変わらないように見えた。(貝畑氏)

【Q】NZではエベレスト初登のヒラリー卿の功績や生き方を自然学校などの形で伝えているが、日本でどうなのか？

【A】森林登山学校などで子供たちに教えたことはあるが、安全管理が難しい。事故があった場合、ボランティアの責任問題など、日本では取り巻く状況が簡単でない。(山崎氏)

【意見】これから、こういったシンポジウムや意見交換が大会のたびに行われるようになれば、ランナー自身も自立できるのではないか。(岡本氏)

【意見】登山でも同様、国体のように競技化してしまうことで、本来の登山とは離れた形式も拡大しているが、競技クライミング選手とも自然や危険の問題などに対して、共有出来る準備をしておく必要が有る。(山崎氏)

【意見】トレイルランは安全であることが前提。ブームで企業サイドの思惑にランナーが軽く乗ってしまいカーニバル化しているが、そこに問題があるのではないか？

【意見】トリスアロンの歴史と同様に、大会と競技が先行してしまっている。もう運営のガイドラインの作成など、競技や大会をコントロールする組織が必要になっている。

(文責：岡山スポーツフォーラム 村松達也)